

6月6日 三位一体の主日

箴 8:22～31 ロマ 5:1～5 ヨハ 16:12～15

1. ヨハ

v.13 「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。」

私たちがささげる主日のミサは、聖霊が訪れてくださる場所であって、父なる神の右におられる復活のキリストが、信じる者に与えてくださる救いと終末の裁きの到来とについて語ってくださいます。聖霊は、キリストの救いと裁きによってこれから起こること(v.13)を教え、すべての信者に神の国の栄光に与る希望を得させますが、キリストを信じない人々にとっては、「世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない」(14:17) のです。

イエス・キリストの権威は、「死者の中からの復活によって神の子と定められ」(ロマ 1:4) た方としての権威であります。そして聖霊は、この神の子キリストの終末的な救いの完成に至る「秘められた計画」(ロマ 16:25) を、すべての信者に悟らせるために、父なる神がお遣わしになる「その方」(v.13) と呼ばれています。

2.

三位一体論の古典的表明として、5世紀頃の「キクンケ・ウルト」(通称アタナシオス信条) という文書があります。この文書はカトリックの信仰を定義して、次のように述べています。

「我らが一つなる神を三位において、三位を一体において、礼拝することである。」(3)

そして非常に明瞭な表現で、次のように宣言します。

「かくの如く、御父は神であり、御子も神であり、聖霊も神である。」(15)

「しかも三つの神ではなくて、一つの神である。」(16)

この三位一体の教義が軽んじられるときにはいつも、歴史の教会の危機があったということが出来ます。そして現代のキリスト教にとっても、その危機は決して無縁ではなく、むしろいろいろと形を変えて深刻な問題を生み出しています。

議論するためではなく、また明快に説明し去るためでもなく、これを救済史を導かれる神のありのままの事実として受け入れる信仰が必要です。なぜならこの教義は、「聖霊の交わりの中で、父なる神と共に代々に生き、支配しておられる御子、私たちの主イエス・キリスト」の秘められた計画を、私たちが理解するための前提だからです。

3. 箴

v.22 「主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお、先立って。」

しかし、直ちにそれに続いて、それが天地万物と人間の創造とは根本的に別次元の事柄であることを、

もう一つの表現を用いて語ります。

vv.24-45 「わたしは生み出されていた。深淵も水のみなざる源も、まだ存在しないとき。

山々の基も据えられてはおらず、丘もなかったが、わたしは生み出されていた。」

御子は“他のすべての被造物のように造られた”のではないことを、従ってキリストは被造物ではなくて父なる神の独り子であることを、後の時代の人々は強調しました。

「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。」(マコ 1:11)

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(ヨハ 1:14)

そして、ニケア・コンスタンチノーブル信条はすべての反論を封じる目的で、次のように宣言しました。

「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、

神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られることなく生まれ、父と一体。

すべては主によって造られました。」

この方が私たちの主イエス・キリストであり、教会はこの御子に関する福音を宣べ伝えているのです。

4. ロマ

この福音は、「神の栄光にあずかる希望」(v.2) の福音であり、聖霊は私たちが御国を受け継ぐための保証(エフェ 1:14)として、私たちのささげているミサを訪れてくださいます。「キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。」(ロマ 8:9)

このように、私たちのミサは父と子と聖霊の交わりの場所でありますから、この教会の神秘を表すための司祭の挨拶「主は皆さんとともに」と、これに対する会衆の応答「また司祭とともに」が、何度も繰り返されます。開祭の冒頭から始まって、ことばの典礼ではその中心となる福音の朗読の前に、感謝の典礼では叙唱前の対話句の初めに、交わりの義では平和の挨拶として「主の平和がいつも」という詞を付けて、そして最後に閉祭にあたっては派遣の祝福の前に唱えられています。

土屋吉正著「ミサがわかる」によれば、会衆の応答の中の「司祭」は人ではなくて行為を指すものと理解して、アクセントを後ろに付けるのが正しいと説明されています。

私たちのささげるミサが、人々の心を神の国の希望で満たすものとなりますように。

v.5 「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

ハレルヤ、アーメン。

6月13日 キリストの聖体

創 14:18～20 Iコリ 11:23～26 ルカ 9:11～17

1. ルカ

v.13 「しかし、イエスは言われた。“あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。”」

言うまでもなくここで「あなたがた」とは使徒たちのことであり、この務めがキリストから使徒たちに委ねられたことを説明するために、この言葉が共観福音書すべてに保存されています。ヨハネ福音書にも殆ど同じ形で収録されているこの物語りが、初代教会において感謝の祭儀と切り離して解釈されたことはありませんでした。そして代々の教会は、使徒継承によって、この務めが使徒たちの後継者である司教と、司教に従属する司祭に受け継がれたと理解することによって、その時代の感謝の祭儀をささげて来ました。

ですから、ミサ典礼書の総則の中の次の記述は、福音書のこの命令の現代における適切な説明であると言うことが出来ます。

「最後の晩餐において、キリストは過越のいけにえと会食とを制定されたが、主御自身が行い、そして御自分の記念として行うよう弟子たちに託されたのと同じことを、司祭が主キリストの代理として行うことにより、十字架のいけにえが教会においてたえず現存するものとなる。」(暫 72 = 現 48)

v.17 「すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。」

小教区のミサは、その特定の共同体ごとの個別の行為ではなくて、全世界のすべての教会と共にあり、普遍の教会の一つの枝としての行為であることを思い起こすことは、大切なことです(同 暫 113 = 現 75)。

2. Iコリ

v.23 「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身も、主から受けたものです。すなわち……」

使徒パウロは、他の使徒たちのように生前のイエスとは面識がありませんでした。ですから彼は、あの最後の晩餐の席での主の命令を受けた人々の中にはいませんでした。彼は明らかに原始教団を通して主の言葉の伝承を受けたのでした。にもかかわらず、彼は後の時代の司教たちのような、使徒の後継者ではなくて、「使徒！」でありました。なぜなら彼は復活の主と父なる神御自身によって使徒とされたのであり(ガラ 1:1)、彼が受けた伝承の背後にはその伝承の本来の担い手である天上のキリストが立っておられたからです。

今日に至るまで、歴史の教会の使徒継承の背後には、同じ天上のキリストが立っておられることを、私たちは信じています。しかし、歴史の教会の司教たちも司祭たちも、決して「わたし自身、主から受けた」と同じレベルで言うことは出来ませんでした。彼らは教導職として、使徒たちが伝えたことに奉仕し、これを教える者であり、いつでもどこでも決して使徒自身に取って代わる者ではなかったからです(神の啓示に関する教義憲章 10)。

3.

聖体の秘義は、これに与るすべてのキリスト者の一致のしるし、愛のきずなでありますから、歴史の教会はこれを大切なものと考え、その規制を使徒座の権威の中に置いて来ました。ミサ典礼書はこのような背景を持ったものでありますから、誰も、たとえ司祭であっても、任意に変更したり修正することは許されていません(典礼憲章 22)。

現代日本におけるミサの乱れは、司祭および会衆がミサ典礼書を軽んじる傾向にあるため、事実多くの信者たちの無知と無関心が当たり前の状態になっています。

ある教会では交わりの儀で、先ず司祭と祭壇奉仕者が静寂のうちに拝領を始め、続いて聖歌隊の人々があたかも特権階級のように拝領をすませた後、一般の会衆の拝領が始まって暫くしてから、やっと拝領の歌が聞こえて来るという始末です。ミサ典礼書の総則は、使徒パウロが書き残した主の晩餐の制定に関する教えを正しく理解して、「司祭が秘跡を拝領している間に、拝領の歌が始まる」(暫 86 = 現 56) と定めているのです。なぜならそれは、聖体を拝領する司祭と会衆全員の一致を表現し、心の喜びを示すためのものだからです。このような逸脱は、是正されなければなりません。

4. 創

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。」(ヘブ 5:8-10)

私たちの主イエス・キリストは旧約の祭司と同じアロンの子孫ではなく、ユダ族の中から、ダビデの子孫から生まれ、死者の中からの復活によってメルキゼデクによって予兆されていた永遠の大祭司と定められました。私たちの祭壇は、このキリストの祭壇です。私たちはこのキリストの御からだと御血にあずかって生きる神の国の相続人であることを、皆で感謝しましょう。

ハレルヤ、アーメン。

6月20日 年間第12主日

ゼカ 12:10～13:1 ガラ 3:26～29 ルカ 9:18～24

1. ルカ

v.20 「イエスが言われた。“それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。” ペトロが答えた。“神からのメシアです。”」

初代教会の信仰宣言は、初めはキリストを言い表す短文定式が用いられたものと考えられます。例えば、「イエス・キリストは神の子であると信じます」(使 8:37)、「イエス・キリストは主である」(フィリ 2:11)、「イエスはメシアである」(Iヨハ 2:22)、「イエス・キリストは肉となって来られた」(同 4:2) などがありますが、それらの宣言の前提となっているものは、イエスはメシア(キリスト)であるという信仰であります。

福音書はイエスの生涯の歴史的な物語りの記録として書かれた書物ではなくて、神がキリストによって実現された救いを宣教するために、初代教会によって生み出されたものであります。ですから私たちの信仰の対象は、教会によって宣教されたキリストとその秘められた計画(ロマ 16:25、エフェ 1:9)であって、不確かな資料から空想を交えて復元されたイエスの歴史的な肖像画ではありません。イエスがメシア(キリスト)であるという信仰宣言は、決してペトロの個人的な発言としてではなくて、教会の、使徒的な宣教の基本的前提としての位置を、福音書の中で占めているものなのです。

主イエスが弟子たちに向かって、御自分が彼らを救う者であることを根拠として、権威をもって徹底的な服従を要求された物語りも、これは後の時代のキリスト者のための宣教として語られているのであって、その意味で聖書は常に、信仰の決断を呼びかける書物でありました。

2. ガラ

私たちは皆、イエス・キリストを信じて洗礼の秘跡を受け、キリスト者となりました。

vv.26-27 「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」

現実の世界では、各種の事情によって、“共にミサをささげ”、“共に御聖体を拝領する”ことを妨げられているキリスト者たちが存在します。病気や職業や政治や地理的理由などの他に、宗教的分裂や係争のために祭儀へのふさわしい参加の機会を奪われている小羊たちがいるのです。彼らがどこで、どのような形で教会に属しているとしても、一時的にやむを得ない事情によって、ローマ・カトリック教会のミサに共に参加して御聖体を拝領することが出来ないということが、決してキリストから決定的に切り離されてしまうことにはならないことを、聖書は語っています。

第二バチカン公会議は、エキュメニズムに関する教令(3)で次のように宣言しました。

「それにもかかわらず、信仰によって洗礼において義とされた者は、キリストに合体され、それゆえに正

当にキリスト信者の名を受けているのであり、カトリック教会の子らから主における兄弟として当然認められるのである。」

ラッツィンガー枢機卿はこれを説明して、「ローマ教会は一つの地方教会であり、普遍教会ではない。それは、普遍的責任を有する特別の地方教会ではあるが、それでもなお地方教会なのである」と述べておられます(神学ダイジェスト No.93)。そしてさらに続けて、ご自分の過去の講演の中から引用して、次のように語っています。「何よりもまず、洗礼がある。それは三位一体論的な、それゆえ徹底的に神学的な出来事であり、地方教会の一員となるということをはるかに越えた意味を持つ。……洗礼は個々の教会から起こるわけではない。むしろ洗礼において、一なる教会への扉が私たちに開かれる。洗礼は、一なる教会の現存であり、そして、その教会は、唯一、私たちの新たな母である、天にあるエルサレムからのみ来たり得る。洗礼においては普遍教会が絶えず地方教会に先立ち、地方教会を作り出すのである。」

カトリック教会の中での何らかの係争によって、ミサへのふさわしい参加の機会を奪われている小羊たちにとっても、この発言は今朝の聖書のテキストの理解への助けとなるのではないのでしょうか。一地方教会との関係に困難が生じているときにも、洗礼を受けたキリスト者は確かに普遍教会に属しているのですから。

3. ゼカ

v.10 「彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったときのように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。」

教会は悔い改める罪人たちの群であり、神がキリストによって赦しと救いを与えてくださるところです。主イエスの受難の物語りの中で(ヨハ 19:37)、復活された天上のキリストの再臨の希望が語られる中で(黙 1:7)、このテキストが引用されました。実に教会は、「かつて私たちのために神の裁きに対して御自身を捧げ、私たちからすべての呪いを取り除き給うたあの裁き主が、天から来たり給うのを、私たちはあらゆる苦難と迫害の中にあっても、首を挙げて待ち望んでいる」(ハイデルベルク信仰問答 52) のです。

ハレルヤ、アーメン。

6月27日 年間第13主日

王上 19:16,19~21 ガラ 5:1,13~18 ルカ 9:51~62

1. ルカ

キリストの福音は神の国の福音であります。それはイエス・キリストの十字架の福音であって、その復活によって私たちに確かなものとされ、今や天上のイエス・キリストは父なる神の右の座に着いて、その再臨の日を待っておられます。

この神の国の福音を宣べ伝える務めは、イエス・キリストから教会に委ねられた最重要な使命であると、初代教会は理解しました。そしてこの使命が、キリストの再臨の日まで、代々の教会に受け継がれて行くために、教会は新約聖書を編集してこれを後世に伝えたのでした。

この福音は、使徒パウロが「ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなもの」(Iコリ1:23)と語ったように、通常の人間の感覚では捉え難いものであり、復活のイエス・キリストによる派遣と聖霊の助けこそが、教会の働き人たちの宣教の支えであると考えられていました。ですから、福音の宣教者としての使命に与ってその一端を担うということは、非常に重い決断を伴うのだということを、このテキストは私たちに教えています。

近代の教会において、信者がキリストの福音についての教えを司牧者から受けることと、司牧者がこれを信者に伝えることとは、当然の権利と責任であると理解されて来ました。特に第二バチカン公会議は、この権利と責任がより効果的に有効になる方向づけを、その公文書によって示したのでした。

今朝の福音書の日課を通して、天上のキリストは再び教会の教導職にある人々に向かって呼びかけておられます。そしてそれを聞く私たち信者は、自分たちが持っているキリストの福音についての教えを司牧者から受ける権利を思い起こします。彼らはキリストの福音を、使徒たちが伝えた通りに、現代の教会の会衆に伝えるために、主の特別な召しと恵みを受けて聖別された人々であります。

2. 王上

イスラエルの預言者の偉大なる系列の最初に位置するエリヤと、その活動を受け継いだエリシャの物語りは、ヤーウェ宗教による北王国におけるすさまじい廓清運動の記録であります。そこに脈打っているヤーウェへの情熱が、このエリシャの召し出しの場面の背景をなしています。それはエリシャにとって命がけの召命であり、後戻り出来ない服従の決断でありました。

v.20 「行って来なさい。わたしがあなたに何をしたいのか。」

エリシャを召し出したのはエリヤではなくて、イスラエルの神万軍のヤーウェでありました。そのように、現代の教会における奉仕職への召命も、人からではなくて、天上のキリストから訪れます。

3. ガラ

v.18 「しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。」

ここで問題になっているのは、ユダヤ教の律法主義、特に割礼の律法に関する事柄でした。「律法は聖なるもの」(ロマ7:12)でありながら、それに対比する形で、キリストが信じる者に与えてくださった信仰と服従の自由が、ここで論じられています。そして、聖なる律法が成し遂げられなかったことをキリストは実現してくださった、それが自由であるということです。

一人一人のキリスト者は、法や規則によってではなくて、各自に与えられている信仰と服従の自由によってイエス・キリストを信じ、共にミサをささげる共同体を形成するという考え方の源泉を、ここに見る思いがします。

EUの成立に至る近年の議論によって、補完性の原理がすっかり現代世界の常識となり、カトリック教会の組織の運営に関してもこの原理を参考にしようという傾向が見られるようになりました。そのひとつに“ARCC”(<http://www.arcc-catholic-rights.net/>) があります。本年1月の司牧書簡「横浜教区における改革の基本方針」でも、梅村司教がこの原理を取り上げておられます。

大切なことは、神の国の福音が現代の世界で宣べ伝えられ聞かれるために、これを伝えこれを受ける責任と権利が、キリストが与えてくださった自由と聖霊の助けによって、効果的に有効になることです。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力」(Iコリ1:18) なのですから。

ハレルヤ、アーメン。